

令和2年度総合情報基盤センター研究開発報告書

令和3年 5月 21日

研究代表者	氏 名	所 属
	秋山 優	地域共創学部
研究分担者	松本 孝徳	入試部
	太田 克司	総合情報基盤センター
研究課題	主体性評価等に関するルーブリック評価支援ツールの研究	
研究開発期間	令和2年 4月 1日 ~ 令和3年 3月 31日	
研究の概要	<p>(1) 研究開発の背景 (動機)</p> <p>近年、学力の3要素や主体性に代表される非認知能力などの評価が必要な機会が増えてきており、ルーブリックは評価する対象や内容に合わせて、評価基準と評価の項目数を調整することができるため、上述したような場面ではとても効果的である。しかし、ルーブリックを支援するソフトウェア [日本語] は存在しておらず、早急に開発する必要が出てきている。</p> <p>(2) 研究開発の目的 (解決すべき課題)</p> <p>ルーブリック評価は、その効果は実証されているが、その評価に関連する資料の作成や評価後の集計に時間や労力がかかる。特に、多人数の評価を複数人で行う場合はより時間や労力がかかる。本研究は、ルーブリック評価にかかる時間や労力を削減することを目的とし、その効果を実証することで、本学におけるルーブリック評価の導入を促進できる。</p> <p>(3) 研究開発の目標</p> <p>ルーブリック評価にかかる時間や労力を30%削減することを目標とする。現在、ルーブリック評価は育成型入試の育成プログラムで導入されている。すでに実施したプログラムのデータを活用し、作業にかかる時間や労力を開発後のツールを使った場合と比較検証する。</p> <p>(4) 研究開発の方法</p> <p>育成型入試の育成プログラムで導入されているルーブリック評価をモデルとして、ルーブリック支援ツールを開発する。現在、すべてExcel及びWordで行っている作業 (登録者の設定から評価の確定、帳票の出力、分析) と、ツールを使った作業を比較検証し、その有効性を実証する。</p>	
研究の成果	<p>研究開発の目標として、時間や労力を30%削減することを目標とし開発を行った。令和3年度の育成プログラムは、育成プログラムの回数が1回だったが (令和2年度: 2回)、育成プログラムの面談者数が237名と過去最高の人数であった。その令和3年度育成プログラムで本開発の支援ツールをオンラインで使用した結果、前年度より早い時間でルーブリック評価を終え、その後の関係書類の出力などがスムーズに行えた。</p> <p>特に、時間や労力が削減された項目としては、①面談者の登録、②面談後の定性的評価コメントの入力、③面談後の定性的評価コメントの校正作業、④ルーブリック評価の共有による大幅な評価ブレの予防⑤各種帳票の出力、⑥事後データの出力および分析である。前年度は、面談者全員分のExcel入力シートを準備し、メールでアドミッションオフィサーに配布し、ルーブリック評価等を入力後、メールで収集、収集後、面談者数分の帳票を出力し、再配布して校正し、再入力を行った後に、データを再収集し、帳票を出力していた。加えて、ルーブリック評価等を入力したままでは分析しにくいと、再度データ補正を行い分析していた。本開発によって、作業工程の圧縮に加え例年2回分の以上の人数を1回で処理することができたことは、目標としていた時間や労力の30%削減が達成できたことを示している。</p> <p>さらに、上述している時間が削減されたことで、前年度に比べて面談後の高校へのフィードバック期間を確保することにも効果を発揮した。</p> <p>以上のことから、本研究により、ルーブリック評価を組織的に行うにあたって、ルーブリック支援ツールをオンラインで使用するにより、時間や労力の大幅な削減が見られることに効果的であることが判明した。</p>	

以上

※ 提出締切日 : 令和3年5月21日 (金) (期限厳守)